

初期・活水学院の三人の娘たちと近代日本 — 神近市子・中山マサ・北島艶の歩んだ道 —*

森 泰一郎**

Three Girls in early Kwassuigakuin & Modern-Japan

Taiichiro MORI**

はじめに

～明治37～8年頃の活水学院生の1枚の写真～

本稿は、2013年12月13日大村市で開催された「新長崎研究会」で発表した同名の講演を基に構成を変え、新たに得た知見によって改稿したものである。

「活水学院100年史」(昭和55年刊)の資料編に掲載された写真集の中に、「明治末期の活水生(明治37年、8年頃)」の写真がある。神近市子、飯田マサ(後の中山マサ)、北島艶等14名が一同に映った集合写真である。この3人が同時期に活水学院に学んでいる。この頃の活水学院は、未だ

創設者ラッセル女史が大いに腕を振るっていた時代である。ラッセル女史は、どのような教育をしていたのか。ラッセル女史の薫陶を受けた当時の生徒たちは、どのような人生観を持っていたのか。本稿で取り上げる3人の女性は、間違いなく近代日本の形成過程で、社会的に指導者だった女性たちなのである。彼女たちの人生を追いながら、ラッセル女史が行った教育の意味を考えたい。本稿では、初期の女子ミッション・スクールのミッションが、いかに実現されていったかを僅かでも明らかにしていきたい。



1章 日本近代化の過程での女子教育とキリスト教

明治初期からの近代化の過程で、女子教育は重視され早くも、明治7年には、女子師範学校が設置された。江戸時代後期には、寺子屋が全国に普

及しており、識字率は、幕末には50%を越えていたといわれる。明治初期から政府が、女子教育に目を向けたのは、家の中心となる良妻賢母を育てるという点にあった。従って、そこには女性の人

* Received February 1, 2014

**長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

間としての自立や女子の高等教育への視点はなかった。女子高等師範学校が設置されたのは、明治23年まで待たねばならなかった。

女子の高等教育の面では、私学に頼らざるを得なかった。切支丹禁教令が外された明治6年以降、英米のキリスト教各派は、こぞって日本に宣教師を送り、日本のキリスト教化を計ろうとした。キリスト教各派は、青少年育成のための学校を設立していった。とくに、官立の手が出なかった女子教育に力点がおかれた。カソリック教会は、幕末・長崎での信徒の発見以降、信者の掘り起しが行われ、女子教育へ目が向いたのは、プロテスタントに較べて遅れた。

明治の早い時期につくられた女学校は、改革派（プレスベテリアン）によるフェリス女学校（明治3年）でヘボン塾のキダー女史を中心に始められた。アメリカ・メソジスト監督教会による海岸女学校（青山女学校・明治7年）がスクンメーカー女史によって始められた。この学校は、メソジスト・監督教会の婦人組織である婦人外国伝道協会（WFMS）の支援によるものであった。イギリス聖公会は、長崎から移ったウイリアムスによって立教女学校（明治10年）が始められた。

メソジスト・監督教会の婦人外国伝道協会（WFMS）は、未だキリスト教を知らぬ世界の婦人に福音（キリスト教の良き教え）を伝えようとする組織で、教育と福音伝道奉仕活動（社会福祉活動が中心）を展開した。活動は広くインド・中国・日本・朝鮮半島・東南アジア・ブルガリア・イタリア・メキシコ・南米に及ぶ。日本では、函館・弘前・仙台・東京・横浜・名古屋・福岡・長崎・熊本・鹿児島が視野にあった。教育の目的は、クリスチャン婦人の育成にあった。

長崎には、明治6年2月に、聖公会のバーンサイド宣教師、改革派のスタウトが着任し、同年8月には、メソジスト派のデビソンが着任した。バーンサイドは、健康を損ね、同8年にモントレイが着任した。聖公会のモントレイは、同10年に東山手にアンデレ神学校を設立、同12年に長崎英和学校を始める。グッドオール女史が、同12年に女学校を開いた（十人女学校）。改革派では、スタウトが自宅を開放し女子教育を始めたが、女学校開学には至らなかった。20年に東山手にスチール・アカデミー（東山学院）を設立した。

メソジストのデビソン師は、出島を活動の拠点

にするが、男子教育は、メソジスト監督教会外国伝道局へ、女子教育は、WFMSへ教師の派遣を要請する。男子教育は、ロング師を派遣し、明治14年にカブリ・セミナーを創った（後の鎮西学院）。女子は、ラッセル女史とギール女史を派遣した。両女史は、明治12年11月に着任した。

2章 ラッセル・ギールと活水学院の教育方針（明治期）

ラッセル女史、ギール女史は、デビソン宣教師宅へ約1週間滞在ののちに、ダッチ・リフォームド教会所有の平屋建ての家に移った。明治12年12月1日から最初の生徒・官梅能（かんばい のう）という1名の学生から女学校を始めた。

ラッセル女史は、1836年オハイオ州出身。ペンシルベニア州ワシントンのワシントン・セミナーに学び、ラテン語ドイツ語を個人教授で習得した。社会人として20年間教育に携わった。学校教育の経験も積んだヴェテランの教育者であった。ここで、WFMSと関係ができ、1879年進んで海外派遣員を志願した。最初は、インド・コルカタに赴任が予定されていたが、デビソン師の要請を知り長崎行きを決心した。

ギール女史は、ラッセル女史の協力者として選ばれた。1846年ペンシルベニア州の出身。同州の師範学校を卒業し、公立学校の教師を務めた。WFMSに係り、海外派遣を志す。ラッセル女史と共に長崎へ派遣された。

WFMSは、教育と福音奉仕活動を行っており、ラッセル女史は、主として教育活動に、ギール女史は、長崎市内の福音奉仕活動に力点があった。

教師2人生徒1人のこの学校は、当時の「西海新聞」に広告も出している。この小さな学校は、毎年生徒が増え続け、明治15年には、43名に達した。この年に東山手に新校舎が造られた。校名も前年の明治14年に活水（聖書：ヨハネ伝4章から）女学校となった。礼拝は、毎朝おこなわれ日曜日には出島教会への参加が義務付けられた。

教育方針は、「女兒が成人した後の婦人として行わねばならぬ事柄を教え込むために最善を尽くします。国語は、大体日本の中学校に準拠し、英語は米国の女学校（セミナー）の課程に従って教えております」（1883年日本在留宣教師会でのラッセル女史の発言）また、学力の素養のない生徒たちには、「技芸部（インダストリアル・デパートメント）」を設けた。もちろん、聖書の他・地

理・物理・ラテン語・歴史・音楽は英語で教えられた。全寮制であった。教師たちは、国語は、日本人教師が教えたが、他の教科は、原則WFMSから派遣された米国人の女性教師たちであった。

ラッセル女史をはじめ教師たちはマンツウマンの教育を行った。

活水女学校の明治20年（1887年）の編成は、次の通りであった。初等科3年（邦学部・英学部・高等女学校程度）、中等科3年（邦学部・英学部・専門学校程度）、高等科2年（邦学部・英学部・大学程度）、神学科4年（専門学校程度）、音楽科5年（専門学校程度）、撰修科（邦学部・英学部）、技芸部（裁縫・縫箔・編法・織法・料理法／オルガン・ピアノ〈予科2年・本科4年〉）学費（月謝）は、正科50銭、技芸科20銭、西洋裁縫・毛糸編法・縫箔50銭、オルガン・ピアノ実地演習週1回1円。

明治26年9月にラッセル女史は、熊本の明治22年の大地震による被害者救済のために活水女園（孤児施設）を創っている。この施設は、後に大村へ移転した。

女子教育のみならず、貧困者や社会的弱者に対して社会奉仕活動を積極的に行っていたことは注目に値する。ラッセル・ギール女史は、キリスト教の持つ社会的弱者救済の点を持って教育していたのである。このことは、活水女学校の女学生たちに大きな影響を与えた。

もちろん、活水女学校で学ぶ女学生は、基本的に裕福な家庭の子女が多かったと思われるが、給費生も多く、裕福な子女ばかりではなかった。キリスト教や英語に興味を持つ子女を積極的に受け入れた。草創期（明治30年代まで）の活水女学校は、このような体制で運営された。

3章 神近市子の生き方

神近市子の生き方を本人の自伝（「神近市子」日本図書センター刊、1997年）に従って、年表風に示すと表-1の通りである。

神近市子の生涯で、最も大きな転機となったのは、活水女学校への編入学であったと思われる。4年間の活水女学校での生活は、文学の才能を目覚めさせ、そして何とんでも抜群の英語力を身に着けたことである。活水女学校の卓越した英語教育法は、外国人教員によるマンツウマンの実践教育であり、全寮制であったことである。また、人間としての婦人の生き方と社会的弱者への憐みの心をラッセル女史から直接学んだ。

神近の記憶によると活水女学校を退学したのは中等科3年である。この原因は、ハンストの事件の首謀者と見られたからである。もちろん、退学処分になったわけではない。自主的退学である。当時学校には、同志社卒業の物理の先生がいてチャペルで教える旧約聖書の天地創造神話に対して進化論を説き、多くの女学生の心を掴んだらしい。神近は、その信奉者で、賛同する女学生が神近の学生寮の居室に結集したと神近は回想する。これがハンスト（ただ、学生寮の食事をとらない）に及んだというものであった。たわいもない話である。しかし、キリスト教の教理に関しては、些細なことも見逃さないという考えでラッセル女史をはじめとする幹部は貫かれていた。当然に、物理の教員も解雇になった。退学して上京する際に、神近は、京都でこの教師に会っている。

活水女学校で培われた英語力に相当の自信を持って神近は、津田梅子の津田英学塾に入学する。（福岡のキリスト教会の信者で、神近の友人の紹介があった。）津田から紹介されてミセス・ファンゲル方にお手伝いを兼ねて下宿する。語学力はさらに上がった。この時代に、作家・詩人との交流が始まる。明治45年万朝報の懸賞小説に神近の「平戸島」が当選した。現代風にいえば、芥川賞作家に選ばれた以上に、文学界には、大きな反響を与えた。一人の作家と見られたのである。

当時、日本最初のフェミニズム運動が始まったばかりであった。平塚らいてうの「青鞥」運動である。活水女学校時代に、身に着けた社会的視野を持つこの新人作家は、当然のように「青鞥」に加入した。瀬戸内寂聴によれば（註1）、最初は、必ずしも積極的ではなく、恐る恐る近づいたらしい。

平塚らいてうの「青鞥」と同人たちは、各紙から奇異な眼で見られ、あることないこと書き連ねられていた。神近は、「青鞥」に書いた。新進作家に書かせるのは当然だったろう。

良妻賢母の時代の中で、日本の女学校を始め多くの女性指導者たちにとっては、「青鞥」の同人は唾棄すべき対象であった。

神近が、「青鞥」の同人となったことを知った津田梅子は、脱会することを前提に、津田英学塾卒業の条件として、弘前の青森県立女学校の英語の教師に赴任することを命じた。神近は、それに従い、弘前の女学校に赴任したが、1学期で「青鞥」の同人だったことが分かり、職を辞して東京に帰る。それから、神近の波乱の人生が始まる。

小説家として、作品を書きながら生計を立て、大正3年(1914年)に東京日日新聞社の社会部の記者となる。記者として第一線で論陣を張った。その中で、無政府主義者・大杉栄と知り合う。

当時、共産主義者・社会主義者・無政府主義者などの社会改革を目指す人々は、幸徳秋水らの大逆事件(明治43年・1910年)にとって「冬の時代」にあった。大杉や堺利彦は、社会主義運動で逮捕され入獄しており、連座を免れた。神近は、大杉栄と愛人・伊藤野枝と大杉の妻保子との多角的恋愛に悩み、清算するために大杉を傷害させた。この事件は、日陰茶屋事件としてセンセーショナルに報道された。神近は、2年の懲役刑を受けた。出獄後、左翼の作家と見られたが、健筆を揮った。多くの翻訳や作品を残した。大杉は、(大正12年・1923年)関東大震災のどさくさの中で、憲兵大尉・甘粕正彦によって伊藤野枝と大杉の甥・橘宗一とともに虐殺された(甘粕事件)。

戦後は、民主婦人協会を創設、左派社会党から衆議院議員になり、6期衆議院議員を続け、売春防止法の成立に力をいれた。ただ、売春防止法成立にあたっては、中産階級的な思想的な転向があったという批判もあった。ただ、生涯を作家として社会的視野をもって活動し、戦後は政治家として社会問題と正面に向き合った。その意味では、大きくいえば、ラッセル女史の娘であったといっているのではないかと。

表-1 神近市子の来し方

<p>来歴と「日陰茶屋事件」から太平洋戦争中まで</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆明治21年(1888年)北松浦郡佐々町に漢方医神近養斎の三女として生まれる。 ◆明治24年(1891年)父死去。 ◆明治30年(1897年)兄伝一死去(医師) ◆明治31年(1898年)一家没落、笹山家に預けられる。 ◆明治32年生家に戻る。 ◆明治34年佐々尋常小学校卒業・高等科進級。 ◆明治37年高等科卒業。教員助手。 ◆明治37年9月(16歳)活水女学校初等科3年に編入。母の縁戚から援助があった。 ◆明治39年(18歳)中等科進学。雑誌「少女世界」に小説「ローラ・イイ」掲載さる。校友会誌に訳詩数編を発表。 ◆明治42年同校を中等科3年で退学、上京して受験勉強を始める。同校の教育に対して
--

不満を持ちハンストをする。首謀者と見られる。

- ◆明治43年(22歳)津田英学塾に入学。
 - ◆明治44年ミセス・ファンブル方に下宿。秋田雨雀、ワシリー・エロシェンコを知る。
 - ◆明治45年万朝報の懸賞小説に「平戸島」が当選する。10月「青鞥」に加盟。
 - ◆大正2年(25歳)青鞥を脱退。津田塾を卒業する条件として、4月に弘前の青森県立女学校に赴任したが、1学期で退職、帰京。東京女子商業学校の講師となり、ミセス・ボールの秘書を務める。小説「手紙の一つ」が青鞥小説集に収録され南雲堂から刊行。
 - ◆大正3年(1914年)尾竹紅吉と「蕃紅花(さふらん)」を創刊。東京日日新聞入社。芝田村町下宿。
 - ◆大正4年宮島資夫・青山菊栄(後に山川)らと大杉栄の「仏蘭西(ふらんす)文学研究会」に参加。11月大正天皇の即位礼取材に京都出張。麻布霞町に転居。大杉栄と恋愛関係になる。
 - ◆大正5年(28歳)東京日日新聞を退社。1月結城礼次郎の秘書となり、翻訳によって生計を立てる。2月大杉栄より伊藤野枝との恋愛関係を告白され、多角恋愛に悩む。11月葉山日陰茶屋で大杉栄を傷害。
 - ◆大正6年控訴審で2年の刑を宣告さる。10月八王子刑務所で服役。
 - ◆大正8年(31歳)出獄して文筆生活にはいる。大正日日新聞の連載小説を執筆する。
 - ◆大正9年鈴木厚と結婚。
 - ◆昭和12年(1937年)鈴木厚と離婚。執筆で生計を立てる。
- ②戦後の生き方
- ◆昭和22年(59歳)民主婦人協会を創立。11月自由人権協会の理事就任。
 - ◆昭和24年「女性思想史」を刊行。
 - ◆昭和28年(1953年)第26回衆議院選挙に左派社会党から立候補。初当選。
 - ◆昭和29年中国視察婦人代表団の団長として訪中。
 - ◆昭和30年第27回総選挙で再選さる。昭和35年第29回総選挙では落選。翌年の30回総選挙で再選さる。昭和42年の31回総選挙で再選された。
 - ◆昭和56年(1981年)87歳で没。

☆戦後の6期にわたる議員活動では、売春防止法の成立に多大な貢献をした。免田事件や在日外国人の人権や居住権問題について闘った。

註1—瀬戸内寂聴「烈しい生と美しい死を」新潮社2012年刊

(4) 中山マサの生き方

中山マサの生涯をマサの長男・中山太郎による伝記「おマサさん～母・中山マサの生涯」(株式会社サンケイ出版、昭和52年刊)によって年表風にまとめたものが、表2である。

中山太郎による伝記には、書かれていないが、マサの父が、イギリス商人だったことは、多くの証言で明らかである。養母・飯田ナカによって育てられた。飯田ナカは、裕福な長崎婦人だった。マサの生涯の転機となったのもまた、活水女学校であり、活水女学校から当時の女学生には考えられなかった米国留学を果たした。それも米国の名門大学オハイオ・ウエスレヤン大学にである。マサは、活水女学校時代に徹底した英語教育によって卓越した英語力を身につけた。ラテン語も必死に学んだことが、留学して役立ったと書かれている。神近市子とは、親友であつたらしい。神近が3歳年上である。神近のハンスト事件にも最初は係っていたらしい。当時のヤング校長から才能を認められて、卒業時に米国留学を勧められた。養母・ナカもマサの背中を押したという。ヤング女史の一時帰国に連れ立って米国へ出発した。オハイオ・ウエスレヤン大学の予科で1年学び正規学生となり、英文学を専攻した。見事に4年間で卒業し、BAの学位を与えられた。極めて優秀な日本留学生であつたという。マサは、米国で何を学んだのだろうか。米国の民主主義と自分の思想を他者へ伝える術であつたらう。帰国後は、母校の英語教師となり、活水女子専門学校の教師となった。母校では、良き教師であつた。人生が一変するのは、東京帝大出の弁護士・中山福蔵との結婚であつた。代議士を目指す福蔵は、数度の落選を経験し、マサは、人生での初めての辛酸を舐めた。福蔵は、あきらめず民政党から出馬し、終戦前まで3回の当選を果たした。日米開戦や大政翼賛会に反対した福蔵は、逮捕寸前であつたが、代議士のために逮捕には及ばなかった。戦後、第一回総選挙で福蔵は落選、第二回総選挙ではマサが自ら出馬し当選した。福蔵は落選。それ以来連続

4期当選して政治家の道を歩んだ。厚生政務次官から、昭和35年池田内閣で日本最初の女性・厚生大臣となった。社会福祉やポリオ対策に力を入れたが、何といつてもマサの真骨頂は、ソ連抑留者の早期帰国に精力を傾けたことだろう。語学力の堪能なマサは国連で、ソ連代表と激しくやりあっている。この働きにより母校オハイオ・ウエスレヤン大学から名誉博士の称号を貰ったことは、マサの生涯で最大の喜びであつた。

マサは、神近市子と違って、戦後は、いわゆる支配体制のただ中にありながらも、社会的な弱者のために闘ったことは事実であり、そして成果を残した。そこにラッセル女史の大きな影を見ることが出来る。

表2 中山マサの来し方

— 来歴と太平洋戦争の中で —

- ◆明治24年(1891年)に松下健、カイの一人娘として長崎市に生まれる。母カイは、産後の肥立ちが悪く死亡。カイの姉・飯田ナカが養女として引き取り、母としてマサを育てた。
- ◆明治36年長崎師範付属小学校を卒業。養母・飯田ナカは、貸家を10軒ほど持ち、十分な資産があつた。
- ◆同年9月に活水女学校初等科に入学した。しかし、全寮制のため自宅に帰ることは、1カ月1回であつた。
- ◆明治43年6月に中等科4年の全課程を修了し卒業式を迎えた。この頃から米国留学を校長のミス・ヤングから打診される。1年間専修科で英語を学んだ。
- ◆明治44年8月ヤング女史と共に渡米した。オハイオ・ウエスレヤン大学入り、1年間は、大学予科のハイスクールで学んだ。
- ◆大正元年オハイオ・ウエスレヤン大学の正規学生になった。英文学を専攻した。学生生活を満喫した。
- ◆大正5年6月オハイオ・ウエスレヤン大学卒業しBAの資格をえた。帰国は、YWCAの手配で旅費も支給してもらえた。帰国した12月から活水女学校の英語の教師に任命された。
- ◆大正8年活水女子専門学校の教師も兼務することになった。蛍雪会のバザーは、マサ先生が始めたものだった。
- ◆大正12年3月青山学院中学部長の川尻正修

(鎮西学院・オハイオ・ウエスレヤン大学出身)の紹介で中山福蔵(鎮西学院・富田林中学・郡山中学・第七高校・東京帝大法学部出身)弁護士と結婚。

- ◆大正13年中山福蔵、帝国議会選挙に大阪から出馬するも落選。この年長男・太郎出産。
- ◆昭和3年第16回総選挙は、初めての普通選挙であったが、中山福蔵は、民生・政友の二大政党に阻まれ落選。2年後の第17回選挙でも落選。
- ◆昭和3年三男雄道、翌4年には、4男鋭郎を生んだ。
- ◆中山福蔵、民政党から出馬し、第17回総選挙から20回総選挙まで3回連続当選。
- ◆大政翼賛会や日米開戦に反対した中山福蔵は、太平洋戦争中特高から狙われていた。

戦後の政治家としての生き方

- ◆昭和21年の第1回選挙では、中山福蔵は落選。翌22年の第2回選挙(第23回総選挙)では、中山マサも出馬(婦人自由党総裁)、当選。福蔵は落選。中山マサは、それ以来続けて4期当選。
4期目に厚生政務次官に任命された。社会保障の充実に力を入れた。中山福蔵は、昭和30年に参議院議員となった。
- ◆中山マサは、昭和35年7月池田内閣の厚生大臣に任命された。
- ◆昭和51年85歳で没。
- ☆中山マサは、海外同胞引き揚げ問題(シベリヤ抑留者の早期帰還)、ポリオワクチン問題、社会福祉施設の充実に力を入れた。

(5) 北島艶の生き方

北島艶こそ、ラッセル女史・ギール女史の教えを受けて、キリスト教の宣教のために生涯を捧げた人である。もちろん、最初ではないが、女性牧師の先駆けである。北島は、生涯を伝道のために多くの活動を行ったが、一切自分の成果を語らなかつたし、書籍も残していない。北島の信仰によって培われた謙虚さがそうさせたのだろう。

佐賀・小城の宮大工の子女が、何故、活水女学校に進学したのか、ラッセル女史やギール女史とどのような人的結びつきがあったのかも分かっていない。北島は、この活水女学校に15年間も学んでいるのである。ラッセル・ギール女史の申し子とってよいだろう。

活水女学校で充分すぎる薫陶を受けて、牧会に

立った。最初の任地は、沖縄県那覇メソジスト教会の伝道師であった。その頃、沖縄県でのメソジスト教会は、断酒・禁煙・廃娯を主張していた。女性には辛い任務であったろう。大正12年には米国ボストン大学神学部大学院で学ぶ。卒業後、青山学院神学科の教授に任命された。しかし、メソジスト教団朝鮮教区の伝道師として戦前まで、布教に努めた。戦後は、日本キリスト教団の正牧師として福岡県の教会で伝道した。後に、母校・活水学院の理事長の任にあった。このことは、創立者ラッセル・ギール女史が最も喜んだことに違いない。活水学院でラッセル・ギール女史がこの学校を開いた一つの目的がかなったのである。

表3 北島艶の来し方

来歴と活水学院での15年の生活

- ◆明治23年9月佐賀県小城郡小城町に生まれた。父は、宮大工であった。詳細は分からない。
- ◆明治34年に活水女学校予備科に入学。15年間活水女学校で学ぶ。
- ◆大正5年(1916年)同校神学校を卒業した。
- ◆沖縄県那覇メソジスト教会伝道師、福岡県社町教会、福岡天神教会に仕えた。
- ◆大正12年渡米してボストン大学大学院を卒業、帰国して青山学院神学科の教授に就任。翌年日本メソジスト朝鮮教区伝道師、ソウル教会婦人伝道師として転出した。

牧師としての戦後の生き方

- ◆昭和22年福岡に引き上げて日本基督教団中部教会牧師、同30年には、西福岡教会主任牧師、佐賀少年刑務所・同婦人刑務所教誨師、九州地方成人保護委員会保護司、日本キリスト教婦人矯風会福岡支部長、活水学院理事長を歴任。
- ◆昭和48年83歳で没

(6) 近代女子教育における活水学院の果たした役割

日本の近代女子教育における活水学院の果たした役割は極めて大きい。同学院が当初から目指したものは、いわゆる日本型の良妻賢母ではなかった。婦人になってからの行わねばならないことを教えた。婦人としての主体的な自己の主張も教えた。社会学者の上野千鶴子は、日本のフェミニズム運動の一つの波は、18世紀末にあったという。その一つは、平塚らいてうの青鞥運動である。与

謝野昌子の書いた山は動くは、全国の中産階級の女性に衝動を与えた。

「山の動く日来る（きたる）。かくいえども人われを信ぜじ。山は姑く（しばらく）眠りしのみ。その昔に於いて 山は皆火に燃えて動きしものを。」

平塚らいてうは書く

「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は、月である。他の依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い月の顔である」

神近市子が、青鞥に係ったのは自然の成り行きであった。平塚や与謝野の叫びに、すぐにも応じうる心情と教育を受けていたのである。大きく言えば、日本の最初のフェミニズムを支えたのは、キリスト教の女学校であったといっても過言ではない。婦人としての主体的な自己主張あるいは婦人としての「心の叫び」をあげてよいと教えたのである。ここに、初期の活水学院に見られるキリスト教女学校の教育の本質があったというべきだろう。活水学院の初期の生き方は、今後大いに評価されるべきであろう。そして議論されるべきであろう。

上野千鶴子がいうように、フェミニズムは、女性が男性と同じスタートに立って戦うことではない。

いつでも女性は弱者になる。育児・介護においてもそうだ。いつでもそれから女性が逃げられる社会は、21世紀の今でもまだ到来していない。

（了）

写真・史料をご提供頂いた活水学院大学図書館に心から感謝の意を表したい。

